



JIC インフォメーション

第 188 号 2016 年 7 月 10 日

年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



写真: (左上)カムチャツカ半島のヒグマ

(左下)ロシアの新幹線・サブサン号～モスクワ～サンクト・ペテルブルグを 5 時間で結ぶ
(右)モスクワ南の郊外コロメンスコエのヴォズネセーニエ教会(1994 年世界文化遺産登録)

旅行・留学の問合せは、お気軽に JIC へどうぞ!

<http://www.jic-web.co.jp>

【大阪日ロ協会・講演会】

日ソ共同宣言 60 周年～その近くて遠い関係を考える

・・・藤本和貴夫 (大阪日ロ協会理事長)・・・2P

<ロシア・ほっと情報>

モスクワ・博物館の夜・・・チステリナ・イリナ・・・10P

ペテルブルグ ЛОФТ ПРОЕКТ ЭТАЖИ・・・山下篤美・10P

日露合同テルミンコンサートのお知らせ・・・9P

【スタッフ旅行記】

ロシアからモンゴル。再び訪れる (その 3)

～8 月 2 日、ウランバートル～・・・金井義彦・・・11P

カムチャツカ・アバチャ山登山記 (4)

・・・白井秀治・・・13P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

【大阪日ソ協会・講演会】 日ソ共同宣言60周年

1956年～2016年 その近くて遠い関係を考える

藤本 和貴夫 (大阪日ソ協会理事長、大阪経済法科大学学長)

さる6月3日、大阪日ソ協会の主催で表記の講演会が開催されました。同協会と藤本和貴夫先生の了解を得て、講演録を掲載させていただきます。(編集部)

今年は日ソ共同宣言が締結されて 60 周年にあたります。この共同宣言は、日本とロシア (当時はソ連) の関係において、非常に重要な区切りの一つとなった条約です。プーチン大統領は就任以来、日ソ関係にふれる時、この日ソ共同宣言に言及しています。彼の発言を聞くと、やはりこの共同宣言が日ソ関係における国境画定問題の基本であり、日ソ関係の出発点であると考えているのではないかと思います。

そこで、もう一度この日ソ共同宣言がどういうものであったかということから話を始めたいと思います。

日ソ共同宣言の内容

日ソ共同宣言は、1956 年 10 月 19 日、モスクワで日本の鳩山一郎総理大臣とニコライ・ブルガーニンソ連閣僚会議議長らによって調印されました。日本外務省のホームページで日ソ共同宣言を見ることができます。共同宣言の正文はロシア語と日本語で書かれていますが、日本語で読める正文の内容で重要なのは以下の 8 点です。

- 1) 戦争状態の終結と外交関係の回復
- 2) 相互の自衛権の尊重、相互不干渉
- 3) ソ連は日本の国際連合加盟を支持する
- 4) ソ連は戦争犯罪容疑で有罪を宣告されていた日本人を釈放し帰国させる
- 5) ソ連は日本に対する賠償請求権を放棄する
- 6) 通商関係の交渉開始 (同日に通商航海条約を締結)
- 7) 漁業分野での協力
- 8) 引き続き平和条約締結交渉を行い、条約締結後にソ連は日本へ歯舞群島と色丹島を引き渡す

この共同宣言で日本とソ連の戦争状態が終了し、国交が回復しました。

第 3 項は、当時としては非常に重要な項目でした。国



連で拒否権を持つソ連が賛成しないと日本は国連に加盟できません。ソ連との戦争状態が終結して、これによりやがて日本の国連加盟が実現した。第二次世界大戦の当事国であった日本が国

際社会に復帰するためには、どうしてもこの共同宣言が必要でした。

第 4 項は、いわゆるシベリア抑留問題です。第二次大戦の終わりにシベリア抑留の問題が起こります。主に満州でソ連軍に降伏した日本軍将兵約 60 万人が、シベリアを始め中央アジアなどソ連の各地に送られて強制労働につかされました。これら抑留者の日本への帰還は、1946 年の 12 月から始まり 1950 年頃までには大半が帰還船で舞鶴に帰国していたのですが、「戦犯」という形で残された人たちが千数百人帰国できませんでした。この人たちが返ってこない限り戦後にはならないということで、これも日本国内で大きな運動になっていました。この日ソ共同宣言でそれが実現することになったわけです。

交渉で最大の問題になったのは、8 番目の領土問題です。第 8 項について、共同宣言の日本語の正文では次のように書かれています。

「日本国及びソヴィエト社会主義共和国連邦は、両国間に正常な外交関係が回復された後、平和条約の締結に関する交渉を継続することに同意する。ソヴィエト社会主義共和国連邦は、日本国の要望にこたえかつ日本国の利益を考慮して、歯舞群島及び色丹島を日本国に引き渡すことに同意する。ただし、これらの諸島は、日本国とソヴィエト社会主義共和国連邦との間の平和条約が締結された後に現実に引き渡されるものとする。」

諸島は「返還」ではなく、「引き渡される」ことになっています。

領土問題について、日本側は当然「四島返還」を主張していましたが、ソ連側は認めない。最終的に日本側は「二島」で、つまり歯舞、色丹で手を打とうとします。交渉からの一時帰国の途上、重光葵外務大臣がアメリカのダレス国務長官とロンドンで会ってその話をする、ダレスから「もし、日本側が二島返還で手を打つならば、沖縄と小笠原諸島は返さない」と脅されたという有名な話があります。その結果、日本側は日ソ関係の正常化後に領土問題を含む平和条約締結交渉を続行することをソ連側に提案し、共同宣言では、「歯舞群島及び色丹島を日本国に引き渡す」という形の文書となっています。

それから、日露・日ソ交渉で常に対立してきた伝統的な問題は漁業問題です。日本の漁業者は、ロシア・ソ連の沿岸では、日露両国の協定による漁場、漁獲量や漁獲の期間に基づいてカニ、サケ、マスなどを獲っているわけで、日本の漁民にとってこの漁場から締め出されることは死活問題です。そのため、常に出魚期が迫るなかで妥協点を探り協定が結ばれてきました。漁業者の立場からすると、「ソ連と平和条約を締結することによって、安定した漁業をやっていききたい」という強い動機がありました。漁業問題の比重は非常に大きかったと言えます。

したがって、国連加盟の問題と抑留者問題、漁業問題の早期解決、そして平和条約の締結と領土問題の解決、これらの 4 点を解決する、解決するためにはある程度妥協せざるを得ない、ということで締結されたのがこの日ソ共同宣言であっただろうと思うわけです。

そこで、どうしてそうなったのか。その歴史背景を知るためには、戦前・戦中の日ソ関係から見ていかなければなりません。

戦前・戦中の日ソ関係

1917 年のロシア革命によって帝政ロシアが崩壊し、社会主義を掲げる革命政権が成立します。これに対して、イギリス軍、アメリカ軍、フランス軍、日本軍など列強の軍隊が、革命政権に対する軍事干渉を行いました。ロシア東部に対する干渉戦争がシベリア出兵 (1918 年～22 年) です。アメリカ軍やイギリス軍は 2 年足らずでシベリアを撤退したのですが、一時、7 万 3 千人という連合国中最大の兵力を投入した日本は 1922 年 10 月までロシア極東に留まり、日ソ関係に深い傷を残しました。

日本がロシアの沿海地域から撤兵した後の 1922 年 12 月に、ソ連邦 (ソヴィエト社会主義共和国連邦) が結成されます。ソ連という国は 1917 年のロシア革命ですぐにできたものではありません。1917 年に革命が起こり帝政政府が倒れると、それまでのロシア帝国は民族別の国と

してそれぞれ独立します。ロシア、ウクライナ、白ロシア (ベラルーシ)、グルジアなど、みんな別々の国になります。その後、1922 年末の段階になって、ロシア・ソヴィエト社会主義共和国、ウクライナ・ソヴィエト社会主義共和国をはじめ、ベラルーシ、ザカフカース (コーカサス) でもソヴィエト社会主義共和国が成立し、これら四つの社会主義共和国が一つになってソ連邦が成立したわけです。

その後、日本は 1925 年 1 月に日ソ基本条約を締結してソ連を承認します。これはイギリス、フランスなどがソ連を承認したのとほぼ同じ時期です。アメリカはかなり遅く 1933 年になって承認しました。日本のソ連承認は中国の動向と大きくかかわっていました。つまり、中国がソ連と条約を結んで日本に対抗してくるかもしれないと警戒したわけです。当時の東京市長で、日露協会の会頭でもあった後藤新平がソ連との関係改善に非常に力をいれました。彼は、ソ連と中国が手を結んで日本に対抗することに注意を払うべきだと考えていたようです。

1925 年から 30 年の初めまでの日ソ関係は平穏であったと言えます。とくにロシア極東地域との経済交流で、木材の伐採や石炭、石油の採掘の利権を日本の企業に与える協定が結ばれています。漁業についても漁業条約が結ばれました。シベリアの天然資源を日本にもってくことは、日本にもソ連にも双方に利益があるということで、関係は良好でした。しかし、1931 年に満州事変が起こって、日本の中国東北部に対する侵略が本格化するにつれて、日ソ関係は不安定になっていきました。さらに 1936 年 11 月の日独防共協定の締結で日ソ関係は悪化し、さらに 1937 年 11 月の日独伊防共協定、1840 年 9 月の日独伊三国軍事同盟と日本がドイツ、イタリアと組むことでソ連の対日警戒心を一層高めます。そのなかで、1939 年 5 月に満州・モンゴル国境を舞台とする本格的な日ソ戦争であるノモンハン事件が起こり、日本軍は大敗しています。

しかし他方では、1939 年 8 月に独ソ不可侵条約が結ばれ、日本も 1941 年 4 月に日ソ中立条約を締結します。とはいえ、日ソ両国は相手に対して友好的であったわけではありません。1941 年 6 月に独ソ戦が始まったとき、日本国内では「今こそソ連を攻撃すべきである」という強い声が上がりました。「日ソ中立条約を破棄してでもドイツの同盟国としてソ連と開戦すべきである」と主張する松岡洋右外相 (北進論) と、「インドシナから南方に進出して資源を確保すべきである」とする近衛文麿首相 (南進論) が対立して、第二次近衛内閣は総辞職します。

結局、日本は南進して、南部仏印進駐から真珠湾攻撃で太平洋戦争に入ることになります。

戦後の日ソ関係～シベリア抑留問題

1945 年 2 月のヤルタ会談 (米英ソ首脳会談／ルーズベルト、チャーチル、スターリンの三首脳がドイツと日本の降伏を見据えて戦後処理の取決めや利害調整を行った) の後、ソ連は 4 月に日本に日ソ中立条約を延長しないと通告しました。要するに、ヤルタ会談で「ソ連はドイツ降伏の 3 カ月後に対日参戦する」という秘密の約束が米英との間で交わされていたわけです。その後、7 月 26 日にポツダム宣言が出され、8 月 6 日に広島に原爆が投下され、9 日にソ連が対日宣戦します。ソ連の対日参戦で軍部の抗戦意志が挫かれ、ようやく日本はポツダム宣言を受諾して、8 月 15 日に敗戦を迎えます。日本が降伏文書に最終的に調印したのは 9 月 2 日、東京湾に停泊するアメリカ軍艦ミズリー号上でのことでした。その間に、ソ連軍は満州の関東軍の武装解除を進めます。そうして 9 月からシベリア抑留が始まるのです。

シベリア抑留者の数は 60 数万人、死者は約 5 万 5 千人と言われていますが、正確な数はわかっていません。ソ連に保存されていた抑留者の名簿が、ゴルバチョフ大統領が来日したころ (1991 年) から、日本の厚労省に届けられているのですが、日本人の名前をロシア人が聞き取ったとおりにロシア文字で書いてあるため、日本語の名前としては不明なものがたくさんあります。亡くなった場所とか出身地はわかるので、いろいろと追跡調査が行われていますが、名前のカタカナ表記でしか判明しないという状況がまだ残っています。

スターリンが何故日本人を大量に抑留したのか、そのはっきりした理由は解明されていません。8 月に出されたスターリンの指令は、60 万人という数字をあげて日本人の抑留を指示しており、戦争で疲弊したソ連の再建のための労働力の確保であったことは間違いないのですが、それ以上の意図はよくわかっていません。

日本側は、いきなりシベリアまで連れて行かれるとは思っていなかったのも、特に最初の冬にたくさんの犠牲者が出ました。抑留体験者の話を聞くと、戦争が終わった直後であり体力は弱っている。しかし、弱っていてもすぐには人は死なない。半年ぐらいたってから死ぬんだと言うんですね。45 年の夏に抑留されてシベリアに連れて行かれ、弱った体で冬を迎えて、シベリアの寒さと過酷な労働に耐えられなかった。しかも、ソ連側にも抑留者に対する食糧も含めて受け入れる準備がなかったため、1 年目に非常にたくさんの人が亡くなったと言われています。

シベリア抑留者の帰還は、1946 年の 12 月から始まります。抑留者は全員、京都府の舞鶴港に船で帰ってきました。1950 年の 4 月で帰還はほぼ終わりましたが、千数百人がまだ帰国できずにいました。残されていたのはソ

連側に戦犯とされていた人たち。関東軍の幹部将校のほか、ロシア語ができて通訳をしていてスパイの疑いをかけられた人も多かったようです。

戦後の日ソ関係～サンフランシスコ講和条約

このような中で、1951 年 9 月 5 日にサンフランシスコ講和条約が締結されます。

日本はサンフランシスコ講和条約で南樺太と千島列島 (ロシア語ではクリール諸島) を放棄しました。その後、日ソ間の交渉で問題になったのは、日本が放棄したクリール諸島の範囲はどこまでかということ、つまり北方四島がクリール諸島に入るのか入らないのかが問題になります。日本は放棄したクリール列島には北方四島は入らないという立場です。また、ソ連はこのサンフランシスコ講和条約に調印していません。連合国側として講和会議に参加していたのですが、条約には調印しませんでした。その理由は、1949 年に成立した中華人民共和国を中国の正当な政府として国連が認めていなかったからです。サンフランシスコ講和会議には中華人民共和国の代表が呼ばれなかったため、それに抗議して最終的にソ連はこの講和条約に調印しなかったのです。

サンフランシスコ講和条約をめぐるのは、日本国内でも「単独講和」(片面講和)か「完全講和」(全面講和)か、ソ連を含めた形で講和条約を結ぶのか結ばないのかということが大問題になりましたが、最終的には吉田内閣はソ連を除く単独講和で決着をつけることになりました。

その後、1953 年にスターリンが亡くなります。1956 年 2 月のソ連共産党第 20 回党大会で当時のフルシチョフ第一書記が行った秘密報告でスターリン批判を行います。これでソ連が変わったという空気が生まれました。ソ連側から日本に歯舞、色丹の二島は返してもよいという話が伝わってくる。同時に、日本側も吉田茂内閣から鳩山一郎内閣に変わっていました (1954 年 11 月)。吉田内閣はソ連を相手にしないという態度だったのですが、鳩山内閣は何とかソ連と国交回復して経済交流を含めた関係を拡大したいということで、内閣の方針が大きく変わるわけです。最終的には、鳩山一郎首相が訪ソして日ソ共同宣言に署名することになるのですが、その前段階として、河野一郎農林水産大臣がソ連との漁業交渉を重ねています。漁業交渉を通じて河野さんはソ連側といろいろなパイプを持っており、日ソ漁業交渉の決着が日ソ国交回復の大きな地ならしとなりました。

冒頭で述べたように、日ソ共同宣言の締結で、シベリア抑留者の帰還、漁業協定、日本の国連加盟が実現します。その年の 12 月に日本は全会一致で国連加盟を果たしました。共同宣言がなかったら国連加盟はできない。その意味で、どうしても国交回復をやらなければならなか

ったのです。その際に、北方領土の問題は、二島を「返還する」のではなく、「引き渡す」という言い方で共同宣言に書き込まれたわけです。

日ソ共同宣言は、日本の国会でもソ連の議会でも批准されていますから、これは正式の条約と同じ効力を持つものであるということになります。



日ソ共同宣言後の日ソ関係

共同宣言で日ソ関係は大きく好転しました。ところが、1960 年 1 月に日米新安保条約が締結されます。これに対しソ連側は、すかさず対日覚書（いわゆるグロムイコ書簡）で、「日本から全外国軍隊が撤退しなければ、歯舞群島、色丹島の引き渡しはしない」と言ってきます。これ以降、ソ連側は「日ソ間に領土問題は存在しない」とい立場をとり続けることになります。他方、日本の国内にも、ソ連とどういう関係を結ぶかという点ではさまざまな流れがありました。「四島返還の要求をソ連は呑まないだろう。北方領土問題がある限り日ソ関係は好転することはない。」米ソ冷戦下で、アメリカは『四島返還論』を後押することで、日本をアメリカ側に引き寄せるために利用しようとしたことは否めません。『二島返還』という考え方もありましたが、これはまだ具体的にその先をどうするのか全く詰まっていない話でした。結局、1960 年代は宙ぶらりんの状態で過ぎて行きます。当面の喫緊の課題であった抑留者の帰還と漁業協定、国連加盟、この 3 つが達成されたあとでは、領土問題はすぐに結論が出る話ではないので、そのままになってしまったわけです。

これが動き出すのは 1973 年です。この年の 10 月に田中角栄首相が訪ソして、ブレジネフ書記長と日ソ首脳会談を行い、共同声明を出しました。田中角栄さんは最近いろいろと再評価されていますが、この点でも田中訪ソというのは大きな意味がありました。首脳会談で決まったことは、一つはシベリア開発。シベリアの天然資源の日ソ共同開発が合意されました。もう一つは、それまでから常にあった日ソ漁業協力。さらに新しく出てきたのが科学技術文化交流の拡大です。

実は私がソ連に研究者として長期に行けたのも田中さんのおかげです。「日本の大学教員とソ連の大学関係者を毎年 5 人ずつお互いに受け入れる」という協定がこの時結ばれました。その協定のおかげで、私もその後、10 か月間モスクワの科学アカデミーの歴史研究所に留学することができました。それまでは、ソ連に留学できたのは、共産党や社会党の関係者など特別なルートはありましたが、それ以外はありませんでした。いろいろな人的交流が拡大していくのも 1973 年の田中訪ソ以後のことです。

田中・ブレジネフ会談を受けて、70 年代から日ソの経済交流が本格的に始まります。当時はシベリア開発の可能性が大きく取り上げられました。しかし、そのあと現在までシベリア開発とは何だったのかと言うと、これは完全にモスクワによる植民地的収奪だったと現地のロシア人研究者たちは言っています。つまり、シベリアでとれた天然資源は外国に輸出されて、その代金は全部モスクワに行ってモスクワのために使われる。現地にはお金が全然落ちてこない。そういう形で、シベリア開発と言いながら、お金は全部モスクワに吸い上られて現地の開発には回らないという構造が出来上がっていったという批判がなされています。

ソ連のペレストロイカ～ウラジオストク演説

ソ連が大転換し、日ソ関係が大きく動き出したのは、1985 年にゴルバチョフ・ソ連共産党書記長が登場してからです。それまで、ブレジネフ、チェルネンコ、アンドロポフと老齢の指導者が続きましたが、結局ほとんど何も変わりませんでした。1985 年 3 月にゴルバチョフさんが 54 歳の若さで党書記長に就任して、その翌年、ウラジオストクで有名な演説をやりました。

この「ウラジオストク演説」でゴルバチョフ書記長は、「ソ連もアジア太平洋国家である」と言います。「わが国はアジアの国家である」と言ったソ連の指導者は彼が初めてです。基本的にソ連はヨーロッパの国家であると、当時ロシア人もわれわれもそう思っていました。けれども、「アジアの国家である」とゴルバチョフさんはこのウラジオストク演説で初めて言いました。彼はこの演説で、ソ連軍のアフガニスタンからの撤退、中国との国境問題の解決、日本との協力、アメリカに対する太平洋安全保障会議などの提案を行いました。

少し脇道にそれますが、中国との国境問題はもともと清朝時代（17～19 世紀）の中国とロシアの関係に遡ります。ロシアは東へ東へとシベリアを進んで来た。清朝は黒竜江（アムール川）を越えて北へと勢力を伸ばしていく。そこでロシアと中国がぶつかるわけです。しかし、国境線という概念、これはヨーロッパの概念であって、

東洋にはありません。歴代中国王朝は、朝貢してきた国の支配者は皇帝との間に君臣関係を結んでいると考えていたわけで、どこに国境線があるかということは全然問題にならない。モンゴル、朝鮮、日本、ベトナムなどの周辺国の支配者はすべて中国皇帝と君臣関係があると見做していた。

ところがロシアはヨーロッパの国なので、当然、国境という概念を持っています。黒竜江（アムール川）で線を引くとか、ウスリー川で線を引くとか、ロシア側は国境線として線を引くわけですが、清朝側はそれがよく理解できていない。結局、中国側に不利な形で線が引かれてしまう。中国にすれば、「ロシア帝国主義が清朝の領土を侵害した、だから返せ」ということで長い間対立してきたわけです。

現在では中国の研究者も国境線という近代の概念を認めています。したがって、1860 年代に引かれた国境線を一応認めているのですが、個々の問題での紛争はたくさんありました。たとえば大きな川があって中州（島）があるとすると、この島はどっちのものかといった問題があって、延々と議論が続いてきました。1969 年にはダマンスキー島（珍宝島）事件といって島を巡って中ソ間で武力紛争までおきました。

ゴルバチョフさんは、ウラジオストク演説で中国との国境問題に対して柔軟に対応すると呼びかけます。さらに、アジア地域で世界第二の経済力（当時）を持つ日本を重視すると言う。アメリカに太平洋安全保障会議を提案する。もう忘れられています、この時ゴルバチョフさんは「広島で国際会議をしよう」と呼びかけているのです。それくらい新しい発言がありました。「ウラジオストクを東に開かれた窓にしたい」というのが、ウラジオストク演説の中心テーマでした。ソ連時代にウラジオストクは軍港だったので、外国人は入れませんでした。外国人だけでなく、ロシア人も許可を取らないと自由に入れない町でした。この演説で、われわれもウラジオストクに行けるなど期待したのですが、結局ウラジオストクが対外開放されたのは 1992 年のことでした。

ゴルバチョフ訪日と「ビザ無し渡航」

こういう動きを受けて、日本側からも新しい動きが出てきます。

1989 年の春に、日本政府は対ソ政策を「政経不可分」から「拡大均衡」へと転換します。それまでは、政治と経済は分けられないということで、日本側は経済協力に簡単に乗らない態度をとっていたのですが、拡大均衡で政治も経済も両方を増やしていこうという方針に変わります。

1989 年 11 月にベルリンの壁が崩壊しました。1991 年

4 月に、ゴルバチョフ大統領が初めて訪日します。ロシア・ソ連の指導者で初めて来日したのがゴルバチョフさんです。この時に調印した日ソ共同声明では、北方四島へのビザ無し渡航、北方四島の軍事力削減、政治対話の継続、貿易経済関係の拡大の 4 点が取り決められました。

北方四島へのビザ無し渡航というのは、つまり北方四島がソ連に所属するならば日本人が四島に行く時にビザが必要になるわけですが、このビザを無しにして渡航を認めたということです。それまでは、たとえば日本の新聞記者がサハリンでソ連の許可をとって（ビザをとって）北方四島に入ると、日本外務省に呼びだされて「けしからん」と怒られました。「日本の領土にソ連のビザを取って行くとソ連領と認めたことになる」というのが日本政府・外務省の立場です。それで、ビザ無しで四島に入れる仕組みを作ったわけです。ただし、条件があって、日本から直接船で行かないといけない。四島に行ける人は、元島民とその家族、北方四島返還運動関係者、報道関係者、学術、文化等の専門家などに限られている。そういう形で現在も続けられています。それが決まったのがゴルバチョフ訪日の共同声明です。

しかし、1991 年 12 月にソ連が崩壊してゴルバチョフ大統領は辞任、ソ連が交わした国際条約や外交関係はロシア共和国に引き継がれました。ロシア共和国の大統領にはエリツィンが就任します。

エリツィン時代～東京宣言から川名会談まで

1993 年 10 月にエリツィン・ロシア大統領が来日して、細川護熙首相と首脳会談を行い、「東京宣言」を発表しました。

東京宣言では、領土問題を「北方四島の帰属に関する問題」と位置づけ、この問題を「歴史的、法的事実に立脚し、両国の間で合意の上作成された諸文書および法と正義の原則を基礎として解決することにより平和条約を早期に締結する」と明記しています。「法と正義の原則」というのは当時さかんに使われた言葉です。また、これ以降「北方四島の帰属問題」という言い方が定着しました。ロシアの領土か、日本の領土か、という両国の主張がもろにぶつかる言い方ではなく、少し曖昧にして「帰属を決める」という言い方になりました。

1996 年、橋本龍太郎内閣では、日ロ関係に関する「重層的アプローチ」ということが言われます。日ロ首脳の間関係をもっと親密にして問題解決の環境を整えようというのが、橋本さんの考え方です。そして、1997 年には、「人間的信頼・相互利益・長期的視点」という対ロ新方針が橋本首相から出される。外交関係でこんな言葉はあまり使わないのですが、ロシアとの信頼関係を深めようという新しい方針が、こういう言葉を使って出されま

した。

そして、同年 11 月にクラスノヤルスクで橋本・エリツイン会談が行われます。会談では「2000 年までに平和条約の締結を目指す」ことで合意しました。この時、橋本首相とエリツイン大統領の周辺の人たちは、おそらく 2000 年までに決着させることができるとかなりの確度で考えられていたと言われています。

翌 1998 年 4 月に川奈会談があります。この会談の中身はいまだに公開されていません。巷間言われていることは、日本側の提案は、「択捉島とウルップ島の間に国境線を引くが、つまり四島は日本側ということにするが、四島管理をロシアが続ける期限は切らない」という内容であったということです。これは、公式にはどこにも書いてありません。したがって、これもどこまで本当かわかりませんが、この時エリツイン大統領は橋本首相の提案に、「Да, да! (そうだそうだ!)」と言った。ところが側近が慌てて「ここで返事するのはまずい」とエリツインを引き止めたという話もあります。領土問題が、解決の一手手前まで進んだかに見えたのがこの川名会談でした。

ところがこの年 7 月の参議院選挙で自民党が惨敗し、橋本さんは辞任します。続いて、1999 年 12 月にはエリツイン大統領も辞任して、この話は立ち消えとなってしまいました。

プーチン政権①～「同時並行協議」の挫折

2000 年にプーチン大統領が選出されました。

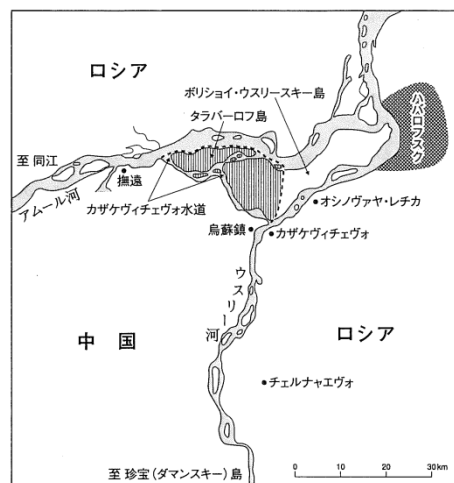
2001 年 3 月に、プーチン大統領と森喜朗首相がイルクーツクで会談して、「イルクーツク宣言」を出します。この時、首脳会談の文書で初めて 1956 年の日ソ共同宣言が取り上げられました。プーチンさんは大統領になった当初から、日ロ関係の基本となる国際文書として日ソ共同宣言に言及しており、今でもいろんな場面で発言を繰り返しています。「ソヴィエト社会主義共和国連邦は、日本国の要望にこたえかつ日本国の利益を考慮して、歯舞群島及び色丹島を日本国に引き渡すことに同意する。」という日ソ共同宣言の第 9 項が、ロシアの首脳によって公式に再確認されたわけです。

イルクーツク宣言の直後に森首相は辞任して小泉純一郎内閣が誕生しました。2001 年 10 月に小泉・プーチン首脳会談が行われます。実はこの会談の内容は、現在では否定されていますが、外務省の外交青書・平成 14 年版にははっきりと書かれています。「歯舞・色丹の引き渡しの様態の議論と、国後・択捉の帰属問題の議論を同時かつ並行的に進めていくことでおおむね一致した」。この記述が登場するのは平成 14 年版外交青書だけです。それ以前もそれ以後もこの文章は出てきません。

しかし、ご存知の通り、その後日本側で同時並行協議への猛烈な批判が出る。当時、対ロ交渉の中心的役割を担っていた鈴木宗男衆議院議員と外務省主任分析官の佐藤優さんが逮捕されて、日本の対露外交は混乱しました。鈴木宗男さんはあまり書いていませんが、佐藤優さんは「この時、領土問題は一番解決に近づいていた」と何度も書いています。批判は、「四島返還を外務省がきちんと主張しなかった」「四島返還をあきらめて二島返還で妥協しようとした」というものですが、外務省としては、二島の引き渡しの様態の議論と、あと 2 つの島の帰属問題を同時並行的に議論するという書き方で、当時のやり方を擁護したということになります。

「同時並行協議」が日本側の内紛で潰れた結果、日本

外務省は再び「四島一括返還」にもどりました。2004 年に大統領に再選されたプーチンは、皮肉をこめて、「日本がこの宣言（日ソ共同宣言）を批准したのならば、なぜ今になって四島の問題を提起するのか」と言っています。



岩下昭裕『北方領土問題－4 でも 0 でも、2 でもなく』中公新書より

中露東部国境問題～「50 対 50 の原則」

この同じ 2004 年に中ロ国境問題が解決しています。その考え方は、「50 対 50 (フィフティ・フィフティ) の原則」です。

地図を見てください。アムール川（黒竜江）が中ロ国境を西から東へ流れています。南から北に流れているのがウスリー川です。2 つの川はハバロフスクで合流して北上し、サハリン（樺太）の北のオホーツク海に注いでいます。このアムール川の中州ですが、タラバーロフ島とボリショイ・ウスリースキー島という大きな島があります。ボリショイ・ウスリースキー島はウスリー川とアムール川の合流点にあります。ボリショイ・ウスリースキー島の西にあるのがタラバーロフ島です。この 2 つの島をめぐる、ロシアと中国が取り合いをしてきたわけです。川の場合、国境線をどこで引くか。山の場合は、山の一番高い地点で国境線を引きますが、川の場合は、主流＝主要航路の真ん中で線を引くことになっています。主要航路というのは、つまり船が通る航路です。タラバーロフ島とボリショイ・ウスリースキー島の南側にカザ

ケヴィチェヴォ水道というのがありますが、この水道と北側のアムール川を比べると、カザケヴィチェヴォ水道の方が狭い。ところが船はカザケヴィチェヴォ水道を通るのだと、こちらが主要航路だとソ連・ロシア側は主張してきた。これに対して、中国側はもちろん広い方が主流だ、2 つの島は中国領だと主張してきました。二つの島はソ連・ロシアが実効支配しており、ロシア人が住んでいました。

最終的にどうしたかという、二つの島の面積を半々にする＝50 対 50 にするという事で決着をつけました。タラバーロフ島とボリショイ・ウスリースキー島の西側が中国領になり、東側がロシア領となって、島の真ん中で国境線を引いたのです。2 つの島はハバロフスク市民の別荘地帯で、中国領になったところにももちろん別荘や住宅があったわけですが、ロシアはそれを全部引き揚げさせました。今は、西半分は完全に中国領です。だから、理屈ではなしに、面積を半々にして問題を解決するというやり方を 2004 年に採用して、係争中の他の場所もすべて「50 対 50 の原則」で問題を解決していきました。これで中国とロシアの国境問題は無くなったわけです。ということで、おそらくロシア側の考え方としては、最終的に「50 対 50 の原則」でどうかということがあるかもしれません。ただし、これに日本がどう対応するかはまた別の話です。

メドヴェージェフ・麻生会談

2009 年 2 月、メドヴェージェフ大統領の時に、サハリンで麻生首相とメドヴェージェフ大統領の首脳会談が行われました。「新たな、独創的な、形にはまらないアプローチ」の下で作業を行うこと、帰属問題の作業を加速化することで両首脳が合意した。この時に、誰かがアイデアを吹き込んだのだと思いますが、麻生さんは「北方四島を面積で半々に分けると、小さい 3 つ（歯舞群島、色丹島、国後島）は日本のもので、大きい方（択捉）も一部分は日本のものになる」ということで、「これで『四島返還』だ。しかも 50 対 50 だ。」と発言した。かなり本気で発言したと言われています。麻生さんは、国会でも「50 対 50」の話をしており、当時かなり議論になりました。

そこで再び巻き返しがあって、その年の 7 月に「北方領土問題解決促進特別措置法」が改正され、「四島は日本の固有の領土である」という国会決議がなされます。

プーチン政権②～「引き分け」による決着

2012 年 5 月にプーチンが大統領に再び就任します。それに先立って 3 月に行われたインタビューで、彼は「引き分け」による決着ということを言いました。「引き分け」というのは柔道用語です。プーチンさんは黒帯の保



持者で、来日すると講道館に行き柔道をやっています。二人の娘さんのうちの一人はサンクトペテルブルグ大学東洋学部の日本語科に在籍していました。だから、日本に親しみをもっているし、日本のことをかなりよくわかっている人だろうと思われます。

2012 年 12 月に安倍政権が誕生しました。なんとかここでもう一度領土問題を前に進めたいと、安倍さんもプーチンさんもずっとその機会を伺っていると思います。

2014 年 2 月、ソチ冬季オリンピックの開会式に安倍さんが出席して良い関係ができたところで、ウクライナのユーロ・マイダン革命があり、ロシアがクリミアを編入してしまう。欧米の対露制裁に加わりつつ、にもかかわらず日露関係を何とか進めたいというのがこの間の安倍政権の動きでもあります。

つい最近、今年の 5 月にもソチで日ロ首脳会談が行われ、安倍首相は「新たなアプローチ」による解決を呼びかけました。「新たなアプローチ」の内容はまだよくわかりませんが、ロシア側から言えば、プーチン大統領が、日ソ共同宣言が日ロ関係の出発点であると考えていることは確かです。ロシアの外務大臣が、「四島返還は認めない」とか、「問題は解決済みだ」とか、いろんなことを言いますが、これはあくまでも交渉上の話であって、プーチン大統領がどう考えているかということが最終決着の道筋を決めると見ておくべきです。

この問題は、最終的には外交的な知恵の出し合いということと、それをお互いの国民にどれだけ納得させられるかということだろうと思います。そういう意味で、1956 年の日ソ共同宣言は、やはり非常に重要な文書であって、ロシア側とすればおそらくこの共同宣言を元にして、これにどういう味付けをするかというところで考えているでしょうし、交渉の中で、日本側としてもそれに乗っていくのかどうかという、決断の問題があるのではないかというふうに思います。

おわりに

ロシアはこれまでずっとヨーロッパの方を見ていまし

たが、このところロシアの政財界は、基本的にはアジアを向き始めています。ウラル山脈から東はアジアです。ロシアの領土の 3 分の 2 はアジアにあります。しかも中国と東アジアの経済発展は類を見ないものです。軸足をアジアに向け、アジアの経済発展を取りこんでロシアの発展をはかるというのが今日のロシアの基本的なスタンスです。したがって、日本ともいろんな関係をさらに拡大したいと考えているのは間違いありません。

ただ、ロシアの極東では、ウラジオストクやハバロフスクという都市とどういう経済関係を持つかということが重要ですが、極東の人口は 600 万人にすぎません。中国東北地方の人口 1 億人と比べるとあまりにも少数で、それが問題です。他方、シベリアの石油パイプライン、ガスパイプラインはウラジオストクまで来ているわけです。従来は、これをそのまま外国に売って、その代金は全部モスクワに行ってしまう。これでは意味がないので、ガスパイプライン、石油パイプラインの出口で、石油ガス関連の産業を作らなければならない。ロシア側はそれに対する日本企業の協力を期待しています。ロシア側から日本側に協力案件がたくさん提案されています。プラント建設など、これは大企業でないとできませんし、資金援助など国が関わってこないとなかなか難しいのではないかと思います。

それ以外に中小企業間の協力が期待されますが、ロシア側での中小企業の育成がどこまで進んでいるのが問題です。

最後に、北方四島の共同開発ですが、これは日本で、とくに北海道の人たちからこれまでもいろんな案が提案されてきました。しかし、これはある程度国境画定交渉が煮詰まらないとうまく進まないのではないかと思います。

質疑；

日本政府が四島返還を主張する理由と外交上のメリットというのは何なのでしょう。

——日本側が主張しているのは、1855 年の日露修好条約で、歯舞、色丹、国後、択捉は日本領とすると決めて、ウルップ島との間で国境線を引いたから、しかもここは戦争で奪い取った領土ではないからというのが日本の言い分、「固有の領土」だと言っているわけです。ただ「固有の領土」という言い方は国際的にはなかなか通じません。たとえばヨーロッパで「固有の領土」という議論は理解されないと思います。これは日本独自の主張ですね。ともかくも、日本とロシアの最初の条約ではそこに線を引いたから、「固有の領土」だというわけです。

それ以外は、樺太の南半分は日露戦争でとったものだから、これを返せとは言えない。しかし、千島列島は外

交交渉で樺太と交換しただけで、これも戦争で奪い取ったものではないので全千島の返還は日本共産党の主張になるわけです。

もし四島が日本に返ってきたらどうなるか。観光資源としてどの程度魅力があるのかは未知数です。北海道でもすべての場所に観光客が行くわけではないので、どの程度人が行くのかはわかりません。

漁業は実質的な利益が絡みます。漁業は海域が重要ですから。そして四島周辺は世界有数の漁場です。

さらに、軍事的な意味はもちろんあります。ロシアの軍艦や潜水艦の太平洋への出口として、この海域が軍事的に重要なのは間違いありません。

領土問題というのは、結局は国のメンツの問題になるわけです。かつてフランスとドイツが奪い合いをしたアルザス、ロレーヌの問題があります。領土は戦争で伸びたり縮んだりするものと言っても、やはり取り合いをして、それがお互いの憎しみを増幅させたことは間違いない。この問題が解消されたのは EU になってからで、人の移動が自由になって、国境線の問題がなくなったからです。ヨーロッパで EU ができたのは、領土問題については非常に大きいし、安全な要素になったと思います。アジアでも、「東アジア共同体」ができて、国境を勝手に出入りしていいということになれば変わってくるでしょうが、現在は残念ながらそういう見通しはありません。

●ロシア・イベント情報●

レフ・テルミン博士生誕 120 周年記念

日露合同テルミンコンサート

* ロシア生まれの電子音楽器テルミンの日露合同コンサートが開催されます (ロシア文化フェスティバル in Japan 協賛事業)。

出演：ナターリア・テルミン、ピョートル・テルミン
竹内正実、濱口晶生、門田佳子 (ピアノ)

マトリョミンアンサンブル Mable and Da 他

日時：8 月 11 日 (祝) 13:00 開場 13:30 開演
会場：早稲田奉仕園スコットホール

東京都新宿区 西早稲田 2-3-1

入場料：一般 3,500 円 (当日) 3,000 円 (前売)
学生 1,500 円

主催：マンダリンエレクトロン

<https://www.facebook.com/events/1726406377639707/>

チケット申し込み、お問い合わせ↓

120@mandarinelectoron.com / 電話:053-488-1920

<ロシア・ほっと情報> 【モスクワ】

「夜の博物館」へようこそ

チステリーナ・イリーナ (JIC モスクワ)

「ヨーロッパ博物館の夜」(Ночь музеев) は 1999 年にフランスで始まって、2005 年から他のヨーロッパ諸国でも開催されるようになりました。現在 40 カ国以上が参加しています。ロシアでは、2006 年からモスクワで毎年 5 月末にプロジェクトが開催されるようになりました。今年で 10 回目となるモスクワの「博物館の夜」は 5 月 21 日～22 日に行われ、市内 100 か所以上の博物館、映画館、公園などが深夜まで入場無料で開放されました。

2008 年からはサンクト・ペテルブルグも「博物館の夜」に加わりました。最近、コレクション保護のため、エルミタージュ美術館と国立ロシア美術館はプロジェクトへの参加を断っていますが、今年は他の 99 博物館が参加しました。うち、55 の博物館は 18 時から 23 時まで、44 の博物館は 18 時から朝 6 時までオープンし、地下鉄は夜も休みなしに動きました。モスクワと違うのは、入場が有料だったことです。全博物館のパスは 400RUB (約 700 円) でした。

モスクワでは、たくさんの博物館が、見学コースだけではなく、パフォーマンスや講義、ワークショップを準備しました。プロジェクト当日の夜、Facebook、Vkontakte のソーシャルネットワーク上でも写真、お勧めポイントが紹介されました。

ロシアでは 2016 年が「映画の年」にあたっているため、多くのイベントが映画に関係するものでした。例えば、テアトラリーナヤ広場では文芸映画、MUZEON 公園では実録映画が上映され、エルミタージュ公園ではアニメ映画を見ることができました。ワークショップにロシアで人気のある俳優や映画監督、音楽家が参加し、子供たちは自分のアニメを作ってみることができました。

ペテルブルグでのポイントは、レンフィルム映画撮影ステージを見学できたことです。「シンデレラ」や「シャーロック・ホームズ」など、人気のある映画の服飾や小道具が展示されました。

「博物館の夜」では、プーシキン博物館やトレチャコフ美術館などの有名ポイントはとても多くの人で混み合います。1 時間以上行列に並ぶことも普通です。それで私は、今年はあまり人が行かない場所を選ぶことに決めて、モスクワ灯具博物館 (Музей Огни Москвы) に行ってみました。この博物館は本当に小さくて、4 つの展示室ですが、結構面白いです。石油ランプ、ケロシンランプ、ガス



古いランプたち (モスクワ灯具博物館)

灯、街灯などが展示されています。博物館の建物も歴史を持っています。17 世紀に白い石で建てられた建築物で、昔はボヤールの家でした。ボヤールはロシアの大貴族階級です。日本でいえば、昔のお公家さん、それとも大商人かな。

皆さんも来年の「博物館の夜」には、モスクワかペテルブルグに是非いらしてみませんか。

* 灯具博物館は、地下鉄駅 Chistye Prudy、Lubyanka の近く、住所はアルミヤンスキー通り、3 です。

【ペテルブルグ】

ロフト プロジェクト エタジー

ЛОФТ ПРОЕКТ ЭТАЖИ

山下 篤美 (JIC ペテルブルグ)

2007 年、ペテルブルグで、「スモーリンスキーパン工場」が移転。その空っぽになった建物の 5 階に、若き建築家やデザイナーが集い、開いた展示空間。それが ЛОФТ ПРОЕКТ ЭТАЖИ (ロフト プロジェクト エタジー) の始まりです。開設後ほどなくして「ロケーション・ホステル」がオープン。ロシア国内はもとより海外からの宿泊客もやってくるようになります。そして、時は流れ、エタジーの活動は建物の階下へ、階下へと進出、発展していきました。

今や作品展示ばかりでなく、70 店舗ものショップが軒を並べる場所になりました。そして、今年の夏からは路



面店がオープン。ついたその名は「コンテナ通り」です。貨物輸送に使われるコンテナを改良した小さなショップで、地元デザイナーの洋服を展示販売したり、あるいはこだわりのカフェが入ったり、個性

的な店が集まっています。このコンテナショップの一つには、日本語を学んだ店主が開いた「たこ焼き屋」も登場し、話題を集めています。こうした小さなビジネスのスタートアップを手助けするのも、エタジーの大事な仕事のひとつになったようです。

「手作りの商品をビジネスにすることを『クリエイティブ・エコノミカ』と言います」。そう教えてくれたのは、日露プロジェクト部門代表のタチアナ・クルシナさん(写真)。

去年、今年と、彼女が手掛けた日本の版画家、造形作家の作品展もエタジーで開かれました。

また、屋上から臨むペテルブルグの景色もエタジーの魅力の一つです。ピョートル大帝が築いた歴史ある美しい街。世界文化遺産の街、ペテルブルグ。でも、この街の魅力は、単にその遺産だけではないことを、日々変化し続けるエタジーは証明しているのです。この街の「今」を生きる若者と出会い、ペテルブルグの創作活動の息吹を、是非皆さんも味わってみてください。

☞ エタジーの住所：Лиговский пр., д. 74

www.loftprojectetagi.ru



ロシアからモンゴル。再び訪れる。

～その3～

2015 年 8 月 2 日 ウランバートル

金井義彦 (JIC 東京)

ウラジオストク～イルクーツク～ウラン・ウデと移動し、ウラン・ウデからのシベリア鉄道一泊で朝 7 時半にウランバートルに到着。ロシアからモンゴルへ陸路で国境を越えて来た。久しぶりのウランバートルなのだが、どれくらい前に来たのか考えると 8 年も前の話になる。街は全く変わっているだろう。



やりたい事のひとつは既に達成した。イルクーツクからウランバートルへ「列車で移動する」だ。個人的な話になるが、今まで飛行機でぼんぼんと移動して訪れていた都市がいろいろな所に散らばっている。これらの都市を列車や船、車、徒歩などで移動してつないでいく「点と点を線で結ぶ旅」にこだわっていて、8 年前は中国の北京から列車でウランバートルまで移動した。これで北京～ウランバートル～イルクーツク～モスクワ～更に西、と線がつながった。そしてやりたい事のもうひとつは巨大なチンギス・ハーン像を見ることだ。

ウランバートルは都市に変わっていた。チンギス・ハーン広場(名前もスフバートル広場から変わっている)の周りには高いビルがいくつも建っていて、サメの背びれの形をした建物『ブルー・スカイ・ホテル』などはドバイの『ブルジュ・アル・アラブ』のようにではないか。道路も歩道もきれいになり整然としていて、埃っぽい感じがしない。いわゆるモンゴルのイメージ「草原」はウランバートル中心部には無いということは前に来て知っていたが、それにしても高いビルがいくつも建っているモンゴルというのはイメージからほど遠い。その上「中心部には無い」草原は、「中心部からかなり遠くに離れないと無い」に変わっていた。車を郊外へ走らせると、ゲルではない小さな家が密集して建っている草原、工場が建てられている草原、敷地を主張して柵で囲われている草原ばかり

が目に入ってくる。しばらく草原が続くのかな、と思っていると広い駐車場を備えたショッピングセンターが現れたりする。本当に中心部からかなり遠くに離れないと草原らしい景色に落ち着かない。

都市から車で約 1 時間でエルデネ村のチンギス・ハーン像テーマパークに到着。馬に乗ったチンギス・ハーン像は高さ 40 メートル、高崎白衣観音くらいでかなり巨大。近くには草原とゲル(パオ、ユルタ)がぼこぼこあるくらいなので高さを比較できず、面白い遠景にはなっていないので少し残念に思う。建物内部に入ると、騎馬頭部にある展望台に上って景色を見渡すことができたり、チンギス・ハーンの巨顔を間近で見られて面白い。また、博物館、レストラン、カフェ、おみやげ屋さんもあり、モンゴルの民族衣装コスプレ体験もできたりする。コスプレはモンゴル人料金と外国人料金が設定されていて、そこではモンゴル人と間違われた。「こんにちは」のモンゴル語「サイン、バイ、ノォー」は 8 年前のモンゴル滞在一週間で何度も聞いて遣って、発音にはちょっと自信があったのでうれしい。衣装を着付けてもらってチンギス・ハーンの巨大靴前で撮影。ほかには、絵ハガキと切手が売られていてポストもあるので、すぐに両方買ってその場で書いて投函できる。後日ちゃんと日本に届いた。すばらしい。

2 つだけだが、やりたい事はできた。ウランバートル一泊、明朝 9 時のフライトで帰国するので今日の残り時間ではホテル視察するくらいが限界

だ。都市になったウランバートルには新しいホテルももちろんたくさん建てられている。世界的チェーンのホテルもあるし、最近オープンしたホテルは機能的でスタイリッシュ。無料で WiFi を使える所もたくさんある。以前来た時に泊まっていたゲストハウス、世界中から集まるバックパッカーのたまり場も健在だ。今回の一泊は『プラチナム』という新しいホテルに滞在することにした。チンギス・ハーン広場まで徒歩 10 分程度の立地で今のところ周囲には大きな施設もなく静かに落ち着ける環境だ。ブッフェの朝食もおいしく、ホテルスタッフの対応も親切だった。高い部屋の窓から街を見渡すと、記憶の中にあったウランバートルの景色は上書きされてしまった。そして、ケンタッキーもルイヴィトンもあるような街を歩く。

旅程最後の夜になろうとしている時間。昨夜はウラン・ウデからの列車で一泊。国境での手続きを記録するために眠らずにずっと起きていて睡眠時間は不十分だ。最終日前夜で疲労がたまっていた自覚はあり、注意力散漫になっていたんだろう。旅行者の気のゆるみを悪いヤツは見逃さない。



JIC撮影(2015年8月)

気付いて振り向いた時には背後に若者 2 人がぴったりとくっついていて、バッグのチャックは開けられていた。

見張り役の若者が 1 人、後方 10 メートルくらいの所で待っている。3 人は走って逃げて行った。「都市に変わる」ということの一面か。ガイドさんには何度も注意しろと言われていたのに、ガイドさんと別れて 1 人で歩き始めた途端にこれだ。最近、若者が遊び半分で外国人を狙うスリが平和大通りで頻発しているそうで、なるほど正にその道だったし、その後おみやげ屋さんでは、スリに遭って警察に行くという話を外国人旅行者がしていたのを聞いた。疲れていたなら無理をせず部屋にいたべきだったか、、、いや、視察業務だけで終わってしまうのは嫌だったから無理をしても 1 人で街を歩きたかった。そして無理をしている自覚があるならもっと気を引き締めて歩くべきだった。情けない。今ここでできるささやかな夢、「ほんの少しの時間だけでもいいから 1 人で歩いて旅を感じたい」をかなえたかったのは、将来の自分の夢を熱心に話すガイドさんに影響を受けていたからだろう。

再び訪れたモンゴルで、草原にゲルがぼこんとある景色よりもっと「おお、久しぶりだな」と思えたのはモンゴルの食べ物だった。ひとつはバター茶。見た目から味を想像して飲むとそのギャップに舌や脳が抵抗するが、ニュートラルな気持ちで飲むとじんわり味わえる。もうひとつは肉。羊の肉。強烈な臭いと量の多さ。以前来た時は一週間ずっとこの臭い肉を普通に食べ続けていたように思うが、久しぶりの臭いに少し怯んだ。ガイドさんは日本料理が好きで納豆まで食べられるという。日本で和牛を食べた事があるそうなので、どっちがおいしいか尋ねてみた。「モンゴルで食べる肉が一番おいしい。日本の肉は臭くない」と。なるほど。モンゴルの人にとってはこの強烈な臭いおいしい味に欠かせないということか。そんな話をしながら 2 人で肉をがつがつ食べる。

ガイドのインへさんは留学経験なしだが何度か日本に来て仕事をすることがあり、もし可能ならば観光の分野を勉強できるような留学を今後してみたいと言う。彼女の夢は本を書くこと。ガイドの仕事で、いろいろなお客さんと一緒にモンゴル中を旅行して、写真も載せた本を出したいと。インへさんに「写真を撮ってもいいですか」と聞かれた。いつかできる彼女の本に、自分の写っている写真が載っていたらいいなと思う。(つづく)



JIC撮影(2015年8月)

カムチャツカ・アヴァチャ山 登山記

《その4・最終回》

白井 秀治 (JIC 東京)

天候も非常に良くなり、風が爽やかに感じられるほど気温が上昇しているのが分かりましたが、アイゼン無しでの雪上は慎重に慎重を重ねても不安なものです。一步を雪面に踏み込みました。

「おや？凍ってない…」

気温上昇で雪面が溶け始めたのでしょう。登っている途中では下山が非常に心配でしたが、踵に力をそれほどかけずに下山できそうです。ガイドさんもサクサク真直ぐに景気良く下山しています。急勾配ですが、自分でも真直ぐ下山できる許容範囲内です。テンポよく下山。

真正面には青空の中に鋭いピラミッド型のカリヤーク火山。下を見れば昨日登ったラクダ山が小さな丘にしか見えません。さらにその向こうには登りでは見えなかった雄大な景色が楽しめます。景色が無料だなんて…。山をやっている本当に良かったとしみじみと感じられる瞬間でした。休憩するつもりはありませんでしたが、どんどん下山しているガイドさんをよそに、その景色を脳裏に焼き付けるため私は数分アヴァチャ山の斜面で立ち止まっていました。

ガイドさんが私が来ていないのに気付いたようで、心配そうに見上げているのが目に留まりました。

「よっしゃ！降りるか！」ストックを持つ両手を大きく振り問題無しと応え、私もサクサク真直ぐに再び下山開始。

直ぐにガイドさんと合流。

「すみません。ただただ景色を見惚れていました」

「もっと見えていても良かったんですよ」

「まあ、でも…チームですからね」

「分かりました。景色を見たかったら声を掛けて下さいね」

「そうします」

さらに下山は続きました。頂上から一時間くらい降りてきたでしょうか。振り返ると山頂までかなりの高低差を降りてきました。斜面もかなり緩くなりました。

テレマークスキーと雪面滑り台の要領で下山

「シライさんは、スキーをやりますか？」唐突にガイドさんが訊いてきました。

「テレマークスキーをやっていますよ」

「じゃ、ブーツをスキー代わりに滑りながら降りましょうか？」

「お！日本でも良くやっていますよ！やりましょう！」



鋭いピラミッド型のカリヤーク火山

ガイドさんの後を私はテレマークスキーの要領で腰を下げながら歩くように滑ります。『こりゃ、体力使わずに楽しく下山できるぞ！』

下山速度がさらに上がっていきます。

プロトレックの時計をしてみると頂上からすでに 800m の高低差を下山してきています。1 時間強で 800m を稼いだ計算になります。B.C. (ベースキャンプ) まで後 1100m。

そして下山ルートの分岐点にやってきました。

アヴァチャ山頂直下は登りと下りのルートが同じですが、標高 2000m 付近からは下山ルートが別に設けてあります。分岐にやってくると雪は無くなり斜面の勾配はかなり緩やかに変わります。富士山の須走口のような細かく砕けた溶岩石のようなルート。もう歩行に関して注意するところは全く無くなりました。途中、ルート外の雪面を長距離滑り台のようにお尻で滑って数百メートルのショートカットを数回。日本の山でも下山時によくやりますが、これがメチャクチャ楽な上に楽しいのです！しかも長距離！ガイドさんもそうでしたが「キヤキヤキヤ！」と子供に戻ったように楽しみました。こんな調子で昨日登ったラクダ山の裏側に降りてきました。

後は B.C. までの約一時間弱。

前日のラクダ山は登山客のレベルチェック

ガイドさんと今回の登山に関してお話をしながら戻りました。注目したのは、『海外からのアヴァチャ山登山客の登山レベルを把握するために、登山前日ラクダ山に足慣らしで登る』ということ。あえて登山客に雪上歩行をしてもらい個人



差をガイドが把握するようです。例えば、赤ジャケットの若者は丸印、青ジャケットのおばさんは三角印、緑ジャケットのおじさんはバツ印という風に…。言い方を変えると、ラクダ山登山で「ふるい」にかけるようなものです。そして当日はグループ全員でスタートして標高 2000m 付近にある気象観測用の小屋まで登り、あらかじめ無理と判断したお客様に下山勧告を申し出るとのことです。

流れがすでに決められていることに驚きました。

結果的に私は登れたので一安心でしたが、自分の歩行についてガイドさんがどのように思っていたかを尋ねたくなり訊いてみました。

「私の場合は何処で判断したのですか？」

「昨日、ラクダ山に取り付く前に谷を降いたのを覚えていますか？」

「もちろん覚えていますよ。ちょっとした急な下り坂の雪渓ですよね」

「そうです。あの雪面を難なく谷まで降りることができたので、私はシライさんは問題無しだと思いました」

「まあ、日本ではもっと大変なところを歩いていますからね」

「そう思いましたよ。下山の歩き方で分かりますよね。いくら体力があっても、雪上の下山は歩行技術が一番重要ですから」

「確かにその通りですね」

「今年のカムチャツカは例年よりも雪が多いので、残念ですが、多くの登山客は登れないと思います。これから気温が上がってきて雪が解ければ話はまた変わりますけどね」

「そういえば、他の日本人グループは登ってきませんでしたね」

「そうです。昨日、ガイド仲間と話しました」

「というと…、昨日の段階ですでに結論が出ていたということですか？」

「その通りです」

「何とも微妙ですね…」

「残念です」

ガイドさんと B.C. までさらに雪渓歩きを選び、下山をしました。

16 時 10 分: B.C. 到着

全行程: 9 時間 20 分

全休憩時間: 100 分

歩行時間: 7 時間 40 分

「シライさん、すごく良いタイムです」

「マクシムさん、本当にありがとう。素晴らしい登山でした」

「今年、外国人の登山客の何組かと登りましたが登頂できたのはシライさんとだけです。ありがとう。今日はこれからどうしますか？」

「今日は、食事をして早めに寝ます」

「そうですね。それが良い」

「明日は 12:00 に B.C. を出発ですね」

「もし良ければ 10 時頃から散策しませんか？ 花がとても綺麗ですよ」

「良いんですか？ それはとても嬉しいです」

「僕も今日はゆっくりします。明日の朝に迎えにきます」

「本当にありがとう。良い山でした」

ガイドさんと私はがっちりと握手をしました。



テントにもどって食事の「ご褒美」

ガイドさんを見送ってから自分のテントに戻り大きな声で「疲れたあ〜！！！」と叫びました。

行動食しか摂っていなかったのが今更ですがお腹が空いているのに気が付き、食事をとることに決めました。

「ザックから一番に出てきたのはあ〜…。ばんばかば〜ん！ やりましたあ！ 緑の中華三昧です！ おめでとうございます！！」

テント内で独り言。「登頂したんだから！ 良いですよ〜！？」とまたまた声に出して言いました。

速攻で MSR ストーブをセッティング。

アタックザックに残っていたチョコレートとドライフルーツ、エネルギー補給のゼリーをまるまる食し、出来あがった中華三昧はものの数分で跡形もなくなりました。

「むふふふふ。ここまでできたら食べちゃいますよお。みかんちゃん！うんっ、もう！食べられたいでしょ！」

おもむろにみかんの缶詰の蓋を開放して胃に流し込むような勢いでたいらげました。これがなんと！美味しかったこと！！幸せ！贅沢！ゴージャス！あっぱれ！登頂の最高のご褒美でした。

テントから改めてアヴァチャ山を見てみると、朝にスタートした時の天候とは一変して、その全容を現しておりました。陽が傾き始め徐々にオレンジ色に変っていくその姿をタバコを吸いながら眺めていました。19時50分でした。

足と両手を広げて大きく深呼吸をしてから再びテントに戻りました。コーヒーを沸かし、もう一服してから本日の登山日記の詳細をヘッドライトを点灯させながらノートに細かく記入していきます。日本でも同じ作業です。自分が登った山の記録はとっておきたいものです。写真もそうですが、文字も同じくらい大切ですよね。

22 時 30 分:消灯

昨夜と違い無風でとても静かな夜。時々、雷鳥の鳴き声が聞こえました。

ぼんやりと一日を振り返っていました。あの強風の中…よく歩いたものでした。久しぶりの『登山』を感じました。

日本人登山ツアーグループ

翌朝、起床時間は 5 時 45 分。テントから外を見てみると…、意外にも空模様は悪く今にも雨が降り出しそうでした。ガイドさんとの約束の時間までに撤収作業を終えておきたかったので、直ちに朝食の準備に取り掛かりました。メニューは「さとうのご飯」をラーメンに入れたラーメン雑炊。持って帰るのはただ荷物になりますから、余った予備食なども食べることにしました。インスタントスープとチキンラーメンをおかわり、ドライフルーツも全てはおぼり、コーヒーを無理やり 2 杯飲み干しました。

身体を伸ばすためにテントから出て一服していると、一昨日ほぼ同じ時間に到着していた日本人登山ツアーグループの3名の方がいらっしゃいました。

テント泊で来たこと、登頂できたこととお話しましたが、こちらのグループの方々には総勢 20 名で誰も登頂出来なかったとのことでした。自分たちは登りたかったらしいのですが、ガイドさんにタイムアウトを宣告され、やむをえず全員で下山したとのことでした。

もちろんガイドさんが昨日の下山時に私に話したことは伝えませんでした。でも、どうも納得していない様子が手に取るように分かりました。それで、高低差で 600m 位、山頂直下のルートではアイゼン無しでは登るのが難しかったこと、ガイドさんとアンザイレも無く少々不安だったこと、技術レベルは厳冬期の西穂高ピラミッドピークくらいは登れないと難しいのでは、と話をしました。

「そんなに大変だったの？」

「ルートは凍っていましたが、キックステップの連続でした」

「キックステップって何？」

「冬山登山の基本的な歩行スタイルです」

「そんなのあたしたちには出来ないわ！」

「結構大変でしたよ」

「ツアー募集には富士山に登ったことのある人だったらって書いてあったのに？」

「私のガイドさんが言っていましたが、今年は雪が多いとのこと
です。例年はどのくらい残雪があるか分かりませんが…」

「それじゃ、無理だわね。残念だったわ」

この人たちは冬山経験が全く無いとのこと。それは難しい
 と思いました。納得したかしていないかは別として、頂上付



近のルートが大変
だったことだけは伝
わったみたいでし
た。

「情報をありがとう。
グループ全員と日
本から同行したツ



アーリーダにも話しておくわ。

「無事に B.C.に帰
ってきたことが一番
ですからね」

「さようなら」

ツアー客と別れて
私はテント撤収準備に入りました。

高山植物の宝庫～花めぐり散策

10 時ちょうど。

テントや調理器具はもちろん登山ブーツもストックも、持ってきていた装備を全てザックの中に収納して、軽いハイキング用の靴に履き替えていると、ガイドさんが今日も爽やかな顔で現れました。

「準備はできていますね」

「行きましょうか」

「シライさんは花が好きですか？」

「山のお花はとても好きですよ。小さくて、可愛くてね」

「アヴァチャ山へのルートと違いカリヤーク火山のルートに行きます」

「了解しました」

歩き始めて 20 分くらいでしょうか。昨日までは全く気付かなかったのですが、あちらこちらに可愛いお花が咲いております。近くで見ると…これは！何と言うことでしょう！標

高わずか 1000m 足らずの世界にチングルマさん達の白いお花が咲き乱れております！本州では標高 2000m 付近でも見かけません！そして少し離れた所には何やら青いお花。これは！ウルップソウです！なんと可憐なんでしょうか！私は白馬岳とハケ岳でしか見たことがありません。その他、黄色が可愛いミヤマキンポウゲや名前は分かりませんがリンドウの仲間など信じられないほど普通に咲いておりました。

アヴァチャ山登頂も良かったのですが、こちらのお花の散策にも非常に感激いたしました。自分がもとお花に詳しくればもっともっと楽しめたことでしょう…。

「残念ですが、そろそろ…B.C.を出発する時間が迫ってきています」

「戻らないといけませんよね」

「シライさん、また来てください」

「マクシムさん。来年必ず来ますよ。今度はツアーを組んできます」

「また会えると嬉しいです」

「その時のガイドはまたマクシムさん。お願いします」

「連絡下さい」

「必ず！」

ガイドのマクシムさんと再度固い握手を交わしました。

B.C.に戻ってくると、私を街へ送り届ける車がすでに待機していました。厚い雲に覆われているアヴァチャ山にお辞儀をして私はザックを背負い車に向かいました。(了)

◆◆編集後記◆◆

▼今年、1956 年の日ソ共同宣言締結から 60 周年。大阪日ソ協会での藤本和貴夫先生の講演録は、戦前から戦後、現在までの日ソ・日ロ関係のポイント、とりわけ北方領土交渉の推移がわかりやすく解説されています。5 月の安倍・プーチン会談で提起された平和条約交渉の「新しいアプローチ」の行方を見守りたいと思います。▼JIC スタッフが書いた現地トピックス、旅行記はロシアやモンゴルの今を知る最新情報です。記事になるのはスタッフが蓄積した知識や情報のごく一部。もっといろいろ知りたい方は、お気軽にお問合せください。▼夏のシーズンを迎え、旅行センターは今年也多忙です。旅行業は、結構煩雑ではあるけれど、国が異なる人と人との交流、異文化交流を支えるやりがいのある仕事。ロシア・旧ソ連の現地情報にアンテナを張りつつ、今夏もスタッフ一同頑張ります。(F)

* * JIC のロシア語留学・研修 * *

27 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 27 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 3,200 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学17年4月生・募集開始



**締切は12月
早い目にお申し込みを!**

期間：2017年4月1日より10ヶ月

**締切: モスクワ、ペテルブルグ 2017年1月15日(水)
ウラジオストク 極東連邦大学 16年12月20日**

モスクワ国立大学 722,500 円(授業料 10 ヶ月)

サンクト・ペテルブルグ国立大学 705,000 円(授業料 10 ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 321,000 円(授業料 10 ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかかります。

◆JIC ロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。
お気軽にお越しください。

東京事務所 平日 9:30-18:00 03-3355-7294

大阪デスク 平日 9:30-16:00 06-6944-2341

※留学相談は、必ず事前に予約してお越しください

7月~11月の予定

7月30日 JIC 長期留学9月生 説明会(東京、大阪)

9月上旬 モスクワ、ペテルブルグ留学生 出発

10月上旬 極東連邦大学留学生 出発

10月上旬 JIC 東京 ロシア語講座 後期スタート!

10月上旬 JIC 大阪 ロシア語講座 後期スタート!

11月中旬 JIC ロシアセミナー(東京)

最新情報は JIC のホームページに随時掲載いたします。

その他のロシア情報も満載です!!